

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## Enlightenment in children's magazines: Yamagata Teizaburo's Shonen'en and Ch'oe Nam-son's Sonyon

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 柳, 忠熙, RYU, Chung Hee メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2507">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2507</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 少年雑誌の啓蒙性

### —山縣悌三郎の『少年園』と崔南善の『少年』—

柳忠熙

#### 1. はじめに

筆者は朝鮮の開化知識人・キリスト教系教育者である尹致昊（ユン・チホ、1865～1945）と崔南善（チェ・ナムソン、1890～1957）の自助論を検討したとき、山縣悌三郎（1858～1940）と崔南善の出版活動が類似していると推論したことがある。山縣悌三郎は少年雑誌『少年園』（1888～1895年刊行）をはじめとして多数の教育・学術関連雑誌と書籍を刊行している。崔南善も1908年に新文館を設立し、少年雑誌『少年』（1908～1911年刊行）をはじめ、翻訳・出版・啓蒙活動に励んだ。1895年『少年園』の廃刊後に山縣が設立した内外出版協会は、崔南善が『自助論』（1918）を翻訳するとき底本とした畔上賢造（1884～1938）の『自助論 上中下』（1906）の出版元である。そして、新文館から刊行された翻訳小説『哀れな友達（불쌍한 동무）』（1912）『誇らしいボタン（자랑의 단추）』（1912）などは、内外出版協会の翻訳物を参考にして出版されている。このように山縣悌三郎と崔南善との間には、出版を通じて、少年向けの教育や人民への啓蒙を図った類似点が存在する。

崔南善の出版事業、特に新文館の活動と刊行物に関する研究や、雑誌『少年』に関する研究は多く行われてきた<sup>4</sup>。また、『少年園』についての研究は主

1 拙著『朝鮮の近代と尹致昊：東アジアの知識人エトスの変容と啓蒙のエクリチュール』（東京大学出版会、2018年）の第9章「植民地朝鮮と自助論の政治的想像力：1910年代における尹致昊と崔南善の自助論」。

2 朴珍英は新文館と内外出版協会との関連性に触れており、山縣悌三郎と崔南善との出版事業の関連性を示唆している（박진영『번역과 변안의 시대』、소명출판、2011年、235～240頁）。

3 류시현『최남선 연구：제국의 ‘근대’와 식민지의 ‘문화’』（역사비평서、2009年）、上掲박진영（2011）、박진영『책의 탄생과 이야기의 운명』（소명출판、2013年）、이경현「1910년대 신문관의 문학 기획과 한국 근대문학의 형성」（서울대학교 대학원 국어국문학과 박사학위논문、2013年）、권두연『신문관의 출판 기획과 문화운동』（고려대학교 민족문화연구원、2016年）など。

4 韓国においては、한기형「최남선의 잡지 발간과 초기 근대문학의 재편：『소년』, 『청춘』의 문학사적 역할과 위상」『민족문화연구』第47輯（성균관대학교 대동문화연구원、2004年）

に日本で行われており、<sup>5</sup> 韓国でも新文館の出版や翻訳における山縣悌三郎と『少年園』との関連性が言及されてきた。<sup>6</sup> だが、山縣悌三郎と崔南善の出版活動、および総合少年雑誌としての『少年園』と『少年』との関係について、具体的な検討はこれまで行われていない。

本稿では、山縣悌三郎という近代日本の知識人と崔南善という近代朝鮮の知識人の出版活動とそれによる啓蒙活動を対象とし、『少年園』と『少年』を中心に、二人の出版活動と両雑誌の編集構成と内容を比較することで、その関連性と差異を明らかにする。さらに日本と朝鮮の近代の始まりにおける少年雑誌の啓蒙性の特徴に関する視点を示す。

## 2. 山縣悌三郎と崔南善の出版活動と二人の接点

### 2.1 日本と朝鮮の出版人としての歩み

山縣悌三郎と崔南善の出版活動について簡単に紹介する。

山縣悌三郎は 1858 年に近江国水口（現在の滋賀県水口町）の生まれであり、朝鮮総督府の英字新聞である *The Seoul Press* の主筆であった山縣五十雄（やまがた・いそお、1869～1959）の兄でもある。江戸末期に幼少年期を過ごした

↘年)、정선태 「번역과 근대 소설 문체의 발견 : 잡지 『소년』을 중심으로」 『대동문화연구』 第 48 輯 (성균관대학교 대동문화연구원, 2004 年)、조윤정 「잡지 『少年』과 국민문화의 형성」 『한국현대문학연구』 第 21 号 (한국현대문학연구, 2007 年)、上掲류시현 (2009)、박진영 同書、上掲박진영 (2013)、上掲論文이경현 (2013)、윤영실 「국민국가의 주동력, ‘청년’과 ‘소년’의 거리: 최남선의 『소년』지를 중심으로」 『민족문화연구』 第 48 号 (고려대학교 민족문화연구원, 2014 年)、上掲권두연 (2016)、최현희 「해석자의 과거, 편집자의 역사: 최남선의 『소년』과 매체의 물질성」 『사이』 第 20 号 (국제한국문학문화학회, 2016 年) など。日本における崔南善の日本留学と『少年』に関する研究は、荻生茂博 「崔南善の日本体験と『少年』の出發: 東アジアの〈近代陽明学〉(Ⅲ)」 『近代・アジア・陽明学』(ペリカン社、2008 年)、田中美佳 「崔南善の初期の出版活動にみられる日本の影響: 1908 年創刊『少年』を中心に」 『朝鮮学報』 第 249・250 輯合併号 (朝鮮学会、2019 年) など。

5 日本での『少年園』に関する研究は、続橋達雄 『児童文学の誕生: 明治の幼少年雑誌を中心に』 (桜楓社、1972 年)、目黒強 『『少年園』における表象としての「現実」と「地方少年」』 『日本文学』 第 47 卷第 12 号 (日本文学協会、1998 年)、酒井晶代 「雑誌『少年園』における「少年」: 論説欄を中心に (1)」 『愛知淑徳短期大学研究紀要』 第 38 号 (愛知淑徳短期大学、1999 年)、大竹聖美 「明治期少年雑誌に見る朝鮮観: 日清戦争 (1894)～日韓併合 (1910) 前後の『穎才新誌』・『少年園』・『小国民』・『少年世界』」 『朝鮮学報』 第 188 輯 (朝鮮学会、2003 年)、柿本真代 「明治期の少年雑誌と読者たち: 『少年園』『小国民』の書き入れをめぐって」 『仁愛大学研究紀要 人間生活学部篇』 第 8 号 (仁愛大学、2016 年) など。一方、韓国での『少年園』に関する研究は、이현정 「청일전쟁과 메이지 시대 소년잡지: 『소년원』(少年園)을 중심으로」 『용봉인문논총』 第 44 号 (전남대학교 인문학연구소, 2014 年) のみが確認できる。

6 朴珍英は内外出版協会の出版物と新文館から出版された翻訳物の内容との関連性について検討しながら『少年園』について触れている (上掲박진영 (2011)、236～237 頁、436～439 頁)。윤·ヨンシルは日本明治期における少年雑誌の傾向を検討しながら、山縣悌三郎と『少年園』について触れている (上掲論文윤영실 (2014)、113～114 頁)。

7 山縣悌三郎の出版活動と生涯については、山縣悌三郎 『児孫の為に 余の生涯を語る: 』

山縣は漢学を修め、明治維新後は東京の育英義塾や東京師範学校（東京高等師範学校の前身）で近代教育を受け、教師を務めた。アメリカ留学、および学習院の教員としての採用が挫折したことを機に、山縣悌三郎は学校教育と教育者としての人生からは離れ、執筆作業と出版活動に邁進することになる。

その後、山縣悌三郎は、バックリィ (A. B. Buckley、1840～1929) の児童向け科学書 *The Fairyland of Science* (1879) を訳した『理科仙郷』(1886) などの教育書物の翻訳作業に携わったほか、『小学校用日本歴史』(1886) 『帝国小史』(1892) 『小学国文読本』(1892) などの教育書を執筆、そして『少年園』をはじめとする少年と青年向けの総合雑誌、例えば、『少年文庫』(1889～1895年刊行、1895年より『文庫』) 『こども』(1890～1891年刊行) 『青年文』(1895～1897年) などを続けて刊行する。日清戦争が終わった直後の1895年に検閲の関係で『少年園』が廃刊すると、山縣は少年園営業部をもとに内外出版協会を設立する。前述したように、崔南善訳の『自助論』(1918) は、中村正直の『西国立志編』とともに畔上賢造の『自助論 上中下』(1906) を底本としたものであり、『自助論 上中下』は内外出版協会より出されたものである。後に山縣悌三郎も『新訳 自助論』(1912) を内外出版協会より出している。

内外出版協会では1900年代にも畔上賢造訳の『リンコン言語録』などの偉人の言行をテーマとした「偉人研究言行録」シリーズ、畔上賢造訳の『自助論 上中下』を含めた「スマイルス五大著書」シリーズ、個人の修養の大事さを語る「修養全書」を刊行している。そして『天路歷程』(1907、百島冷泉〔百島操、1880～1965〕訳。以下同) 『トルストイ短編集』、『形見のボタン』(1912) など、多数の西洋文学の翻訳・出版も手がけている。このように『少年園』から内外出版協会に続く山縣の出版事業は、1880年代から1910年代にかけて、自助論と修養論を主とする少年・青年の教育と啓蒙活動を主導していた。

1914年に内外出版協会は経営難で倒産する。その2年後である1916年に山縣悌三郎は植民地朝鮮に渡り、ミッション・スクールで教鞭を執ったり朝鮮総督府の囑託として勤める。1929年に日本に戻り、1940年に亡くなる。

中人の出身である崔南善は1890年にソウルで生まれる。中人とは、朝鮮時代において士大夫である両班と常民との間の身分を意味し、医術・通訳・行政

△山縣悌三郎自伝』(弘隆社、1987年)、山縣の自伝の解説である荻野富士夫「山縣悌三郎小論」(上掲山縣悌三郎、1987)、『少年園』についての解説である滑川道夫「主幹山縣悌三郎と『少年園』」『少年園：解説・総目次・索引』(不二出版、1988年)を参照した。

8 황미정 「최남선역『自助論』: 中村正直訳, 畔上賢造訳과의 관련성에 관해서」『언어정보』第9輯 (고려대학교언어정보연구소, 2008年)。

9 前掲박진영 (2011)、237～239頁。

10 崔南善の出版活動と生涯に関しては、류시현 『최남선 평전』(한겨레출판, 2011年)を参照した。

など、主に技術職に従事した。崔の両親はともに中人の家柄であり、薬屋を営む裕福な家庭であった。崔は13歳のときに京城学堂で日本語を勉強しはじめ、翻訳物や中国・日本・朝鮮の新聞を通じて世界の変化を理解した。1904年に皇室派遣留学生として日本に渡ったが、同年12月に学校を辞めて帰国し、1906年に再び渡日し、1908年6月まで日本に滞在する。当時、彼は留学生雑誌『太極学報』（1905～1906年刊行）『大韓留学生会報』（1906～1908年刊行）に文章を寄稿しており、後者の編集者をも務めた。この2回にわたる日本滞在与留学生雑誌に関わった経験は、後に新文館の設立と『少年』を創刊する契機となったとも言える。

1908年に崔南善は日本で活版印刷機械を購入して帰国し、新文館を設立する。新文館は編集部と印刷と販売係を擁する出版形態をとり、『少年』をはじめ、教科書・小説・翻訳物など、さまざまな書籍を出版した。雑誌としては、少年向けの『少年』『赤いチョゴリ（붉은 저고리）』（1913年刊行）『アイドルボーイ（아이들 보이 [子供の見るもの]）』（1913年～1914年刊行）『新星（새별）』（1914～1915年刊行）『青年』（1914年～1918年刊行）などのほか、後の1920年代には時事雑誌『東明』（1922年～23年刊行）も刊行した。新文館では、雑誌だけでなく、『春香伝』『洪吉童伝』などの古典小説などを中心に、大衆小説も「六銭叢書」「十銭叢書」という安価なシリーズで販売した。また『ガリバー旅行記（갈리버 여행기）』（1909）『黒人の悲しみ（검둥의 설움）』（李光洙訳、1913）『自助論』（1918）などの翻訳物、『訓蒙字会』（1913）『時文読本』（1916）『チョソンマルボン（조선말본 [朝鮮語の見本]）』（1916）などの教科書というように、多様な出版活動を行った。

崔南善は1919年に起こった3・1運動の「己未独立宣言書」を起草したという理由で投獄される。出獄後は朝鮮の歴史や文化に関する研究に力を注いだ。1930年代に入ると、帝国日本の戦争が拡大していくなか、崔は帝国日本の戦争に協力し、終戦・解放後にその罪を問われる。朝鮮戦争を経て1957年に亡くなる。

## 2.2 山縣悌三郎と崔南善の接点の可能性

山縣悌三郎と崔南善の直接的な交流について確認できる資料は見当たらない。だが、次のいくつかの接点を推論してみることはできる。

まずは山縣悌三郎と朝鮮留学生たちとの交流である。山縣の自伝には、1894年に甲午農民戦争が起こると、続いて日清戦争が勃発し、日本に留学中の朝鮮人留学生たちが朝鮮から学費の支援を受けることが困難となり、山縣はほかの

日本人たちとともに彼らを援助したと記されている。その後、山縣はフィリピンの独立を支援して日本に亡命中だったフィリピン人たちを援助する。後に清国・朝鮮・インド・フィリピンなどの学生および志士たちによって、1900年に近衛篤磨（1863～1904）を会長とする東洋青年会が創立されるが、山縣はその発起人となる。東洋青年会には、1895年に国費留学生として来日し慶応義塾大学と東京帝国大学で留学した張憲植（チャン・ホンシク、1869～1950）<sup>11</sup>が参加しており、山縣は植民地朝鮮に滞在するとき、張の家を訪ねたという。<sup>12</sup> 崔南善の最初の日本留学は1904年10月皇室派遣留学生としてのことである。崔は通っていた東京府立中学を同年12月に中退し、翌年の1月に帰国する。1906年4月に私費留学生として再び渡日し、早稲田大学高等師範部歴史地理学科に入学したが、<sup>13</sup> またも1907年3月に学校をやめてしまう。だが、学校を出た後にも、崔は1908年6月まで日本に滞在した。<sup>14</sup> 崔南善が日本で留学した時期である1904年から1908年にかけての山縣悌三郎の自伝にあるのは、息子の日露戦争の出兵、母の死、息子たちの結婚など、私事についての記録が主であり、<sup>14</sup> 崔南善についての言及は見当たらない。しかし、崔南善は、『大韓留学生会報』の編集者や留学生団体の太極学会の平議員も務めるなど、朝鮮人留学生と深く交際していたことを考えれば、朝鮮人留学生たちと親密な関係を結んでいた山縣や彼の出版事業について知っていた可能性も存在する。

もう一つは、山縣悌三郎と尹致昊との交遊関係である。山縣は1914年に植村正久（1858～1925）牧師に洗礼を受けてキリスト教徒となる。教育者でありキリスト教徒であった山縣は、彼と同じく教育者でありキリスト教徒である尹致昊と親密な関係を結んでいた。山縣は、尹致昊が初代朝鮮総督寺内正毅（1852～1919）の暗殺計画の理由で検挙され投獄されたこと（105人事件〔寺内正毅総督暗殺未遂事件〕、1912）<sup>15</sup>を聞いて痛嘆し、この事件は事実無根であると批判する。<sup>15</sup> 尹致昊の日記にも、植民地朝鮮における山縣の様子が見られる。山縣が植民地朝鮮のミッション系の学校で教えることになったことは、内外出版協会の廃業、弟の山縣五十雄の勧めとともに、尹致昊との関連があると考えられる。<sup>16</sup> 山縣の自伝には1915年に出獄した尹致昊が彼を訪ねてきたと記されている。山縣は尹致昊が訪問した翌年に植民地朝鮮に渡っており、尹が

11 前掲山縣悌三郎（1987）、135頁。

12 前掲山縣悌三郎（1987）、144～145頁。

13 崔南善の日本留学については、前掲류시현（2011）、29～30頁、前掲田中美佳（2019）、42～60頁参照。

14 前掲山縣悌三郎（1987）、150～154頁。

15 前掲山縣悌三郎（1987）、159～160頁。

16 同書、167頁。

設立した松島普通高等学校（1906年に設立した韓英書院の後身。1917年に校名を改めた）および好寿敦（Holston）女塾などのミッション・スクールで教鞭を執ったが、このことも尹致昊と関係があると推測される。

また新文館の設立（1908年6月頃）とはやや時間的な差はあるが、尹致昊と崔南善とともに青年学友会（1909年に結成されたと推定）に関わっている。尹致昊は青年学友会の会長を務めており、当時新文館から出ていた『少年』は当会の機関誌の役割を担っていた<sup>17</sup>。1910年4月の『少年』（通巻16号〔第3年第4巻〕）には青年学友会の設立目的と会報とともに、1910年1月に尹致昊がアメリカのサンフランシスコで朝鮮人同胞に対して行った演説が載っている。植民地期における尹致昊の日記にも崔南善についての言及はよく見られ、啓明倶楽部などを中心に朝鮮人に対する啓蒙活動をともにしている。こうした二人の親密な関係は1900年代以降に始まったと推測され、尹致昊を通じて、崔南善は山縣悌三郎と彼の活動を知っていたかもしれない。

### 3. 少年雑誌の啓蒙性：『少年園』と『少年』の構成と内容

#### 3.1 『少年園』の総合少年雑誌としての構成

『少年園』は1888年、天長節の11月3日に創刊し、毎月2回（3日、18日）発行した。創刊号は2段構成で、表紙・目次・巻頭の挿絵・本文（24頁）・付録（4頁、「芳園」）、広告（1頁）、奥付の構成であり、本文には多数の挿絵が入っている。表紙は少年の園を連想させる公園・庭園の木の下で、男女が本を読んでいる絵である。この表紙は基本的に終刊号である第156号（1895年4月18日）までそのまま用いられる。終刊号である第156号は2段構成で、表紙・目次・巻頭の挿絵・本文（40頁、「芳園」は本文中に含まれている）、広告（5頁）、奥付の構成であり、創刊号と比べて約10頁程度が増えているが、全体の構成はそのままである。

『少年園』は、本稿末に付した「表1：『少年園』第1号（1888年11月3日）と第156号（1895年4月18日）の目次」から確認できるように、「少年園」「学園」「文園」「譚園」「叢園」「芳園」と、六つの項目で編集された。それぞ

17 新文館の設立時期については、前掲박진영（2013）、29～38頁参照。

18 青年学友会の設立と活動については、박찬승『한국근대 정치사상사연구：민족주의 우과의 실력양성운동론』（역사비평사、1992年）、99～107頁、기노시타 다카오「105인 사건과 청년학우회 연구」（송실대학교 박사학위논문、2011年）、135～183頁、前掲권두연（2016）、214～219頁参照。

19 第127号（1894年2月3日）から表紙の上に該当号の「少年園」の主要内容（例：（少年立志論・処世之秘訣）最も痛快 最も謹厳）〔第127号〕が見られるが、表紙の絵は変わらない。

20 以下『少年園』の構成については、前掲滑川道夫（1988）、16～21頁参照。

れの項目について説明しながら『少年園』の内容を確認する。

「少年園」には、少年園側の論説と、当時の名士や匿名の論者による論説が載っている。例えば、坪内雄蔵（逍遙）「少年の心に於ける『宇宙』の変遷 并に危険なる『宇宙』」（第3号、第5号）、志賀重昂「日本少年の為すべき事業」（第7号、第8号）、嘉納治五郎「少年訓五則」（第7号、第8号）、無記名「少年立志論」（第127号）などがある。

「学園」は、科学を主な題材として学習と関わる内容および海外の最新情報などを載せる。日清戦争の勃発後には戦争に関連する記事が主となる。例えば、社員翻訳「地球の隣世界」（第3号）、カルチス・ブラウン「ナイアガラ瀑布の大工事」（第135号）、細川潤次郎「教育勅語講座」（第129号）、無記名「戦の勝敗」（第145号）、肝付兼行「教育勅語講座」（第148号）などがある。

「文園」には、詩・創作小説・翻訳小説など、少年読者向けの文学作品が載っている。例えば、尾崎紅葉「日本の春」（第9号）、森鷗外「戦僧」（第10号）、バーネット著・若松しづ子訳『セイラ・クルーの話：一名ミンチン女塾の出来事』（第117号～第132号、途中3回未掲載。「小公女」）、ユーゴー著、抱一庵主人訳「ABC組合」（第145号～第156号、計9回）などがある。このなかで、「ABC組合」はヴィクトル・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』を抜粋して訳したものである。抱一庵主人は小説家・翻訳家の原抱一庵（1866～1904）のことであり、先に『少年園』第145号（1894年11月3日）から第156号（1895年4月18日）（計9回）にかけて連載された後、1902年に内外出版協会から『ABC組合』というタイトルで単行本が出版された。この単行本の序文に当たる「例言二則」に「本訳はヴキクトルユーゴー著『哀史（ラ、ミゼラブル）』中「ABC組合」<sup>21</sup>（The Friends of ABC）に関連する篇章を採抜訳述せるものなり」となっており、ここから原抱一庵は英語本を底本として『レ・ミゼラブル』の内容を一部翻訳したことが分かる。そして、単行本『ABC組合』の内容は『少年』<sup>23</sup>第3年第7巻（1910年7月）に「ABC契」として訳され転載される。



図1 『少年園』第1号（1888年11月3日）の表紙

21 抱一庵主人「例言二則」『ABC組合』（ユーゴー著・抱一庵主人訳、内外出版協会、1902年）。

22 前掲滑川道夫（1988）、18頁。

23 「ABC組合」と「ABC契」の翻訳については、前掲박진영（2011）、430～442頁が詳しい。

「譚園」は、編集局が選んだ偉人伝・西洋美術・児童劇などの文章が載っている。例えば、「游学の栞」(第1号)、中村敬宇(正直)「拿破崙の幼時」(第4号～第5号)、山縣正雄「ネルソンノ幼時」(第7号)、柴庵遯叟「新井白石の伝」(第9号～第10号)、「西洋美術叢談」(第55号～第56号、第59号、第62号、第68号。ギリシャ美術についての文章)、「小供芝居(新年の餅)」(第5号)などがある。この中で「游学の栞」は地方から上京する学生たちに好評を得、後に『明治二十三年 東京游学案内』(1892)という単行本として出版される。<sup>24</sup>

「叢園」は、読者の興味を引くための雑多なテーマを取り上げた、娯楽の欄である。『少年園』の後続の諸少年雑誌も「叢園」に倣って少年向けの娯楽欄を設けた。<sup>25</sup>『少年園』の「叢園」の内容は時期によって変わる。初期には、遊戯・謎解き・面白い話・新刊書評などが収録されたが、第6号からは、上級学校の情報・皇室関連記事・社会情報などが加えられる。そして、日清戦争期には戦争と関連する文章、例えば、朝鮮に関する「朝鮮国王」(第138号、1895年7月18日)、「朴泳孝」(第142号、1895年9月18日)などの記事が載っている。日清戦争後には社会批判的な文章も見られるが、終刊号の「叢園」に載った「渋沢氏の観化宴」は、当時の実業家である渋沢栄一(1840～1931)が戦争中にもかかわらず権力者たちと花見の宴会を開いたことを風刺した内容であり、内務省の検閲官がこの文章を問題とし、『少年園』は停刊となって結局廃刊に至る。

「芳園」は、読者の投稿欄である。『穎才新誌』(1877年創刊。1901[2]年頃に廃刊されたと推定)を皮切りに少年雑誌に少年読者の投稿欄が作られ、こうした流れで『少年園』にも読者投稿欄が設けられた。「芳園」は創刊号では付録としていたが、その後投稿の文章が急増し、「芳園」とともに投稿文章を主に載せる『少年文庫』が1889年に創刊される。投稿内容は、紀行・論説・手紙・漢詩・新体詩・和歌・日記・英作文など、多様であり、その内容によって文体も漢文をはじめとする漢文訓読体・和文・候文など、多様な文体が共存している。『少年園』の「芳園」



于世及三國驛朝

図2 「朝鮮国王及世子」『少年園』第138号(1895年7月18日)

24 前掲滑川道夫(1988)、19頁。

25 前掲続橋達雄(1972)、196～197頁。

に投稿した読者たちは、『少年園』が想定した主な読者層である尋常小学校と尋常中学校の生徒たちだけでなく、卒業生・高等中学校・英語学校の学生なども投稿している。石井研堂（本名：石井民司、1865～1943）の「明治初期の初年雑誌」には「記事を精選し、寄稿者は名家のみ多かりしかば、随つて投書作文の搭載せらるゝ者も、栄冠を得るの感あり<sup>26</sup>」といい、「芳園」は当時初等・中等学校の教育レベルの読者たちの文章力を競う場でもあったことが窺える。こうした『少年園』の「芳園」は、『少年文庫』とその後進である『文庫』にも受け継がれ、『文庫』を中心に活動した文学者（文庫派）をはじめとする、主に詩人・歌人の新人の登竜門となった。例えば、詩人の良子清白（本名：暉造、1877～1946）、詩人の河井醉茗（本名：又平、1874～1965）などがいる。

『少年園』は、論説・学習・文学・娯楽・投稿など、さまざまな欄を設けた総合少年雑誌として評価できる。こうした『少年園』の六園の構成は、以降創刊された『日本之少年』『少年文武』『幼学雑誌』などの少年雑誌にも受け継がれ、『少年園』は総合少年雑誌の典範を作ったのである<sup>28</sup>。

### 3.2. 『少年』の構成と『少年園』との関連性

これまで確認してきた総合少年雑誌『少年園』の構成、とくに「六園」構成という特徴を念頭におきながら、新文館より発行された『少年』を構成と特徴を検討する。

まず『少年』について概略的に述べておく<sup>29</sup>。『少年』は1908年11月1日に発行され、その後、毎月1回刊行され、通巻20号（第3年第8巻、1910年8月15日）まで1909年6月号と12月号を除いて刊行された。通巻20号が出た1910年8月に新聞紙法第21条（治安妨害）によって『少年』は停刊処分を受け、4ヵ月後の1910年12月に発行停止の処分が終わると、通巻21号を既存の形とは完全に異なる形式で出す。しかし、第4年第1巻である通巻22号が当局に押収された後、王陽明の特集号である通巻23号（実質の通巻22号）第4年第2巻を最後に、廃刊となった。

『少年』の創刊号である第1年第1巻は、1段と2段の形式が混じっており、表紙・奥付・刊行趣旨・目次2頁、2巻予想目次・写真3枚、標題紙および本

26 石井研堂「明治初期の初年雑誌」『太陽』第33巻第8号（博文館、1927年6月）、413頁。この文章は雑誌『太陽』の創刊40周年を記念して企画された「明治大正の文化」の一つとして載っている。石井研堂は『自助論』の翻訳者としても有名な中村正直の評伝を書いたこともある。石井研堂『中村正直伝：自助的人物典型』（成功雑誌社、1907年）。

27 前掲滑川道夫（1988）、21頁。

28 前掲続橋達雄（1972）、64頁。

29 以下、『少年』の刊行状況と停刊などについては、前掲박진영（2013）、180～185頁参照。



うに変化したのかを確認する。通巻20号には、創刊号と同様、「少年時言」（「少年園」）、「猷身者」（小説、「文園」）、「ルーズベルト氏の世界的偉大な所以（으루쓰벨트씨의 세계적 위대한 소이）」（「譚園」）、「笑天笑地」（「叢園」）、「少年論壇」（「芳園」）などの5つの要素を確認することができる。だが、科学などの教育的な内容を載せた「学園」の要素が見られない。また、文学作品と関連する「文園」の要素が多く見られるのも特徴的である。

### 3.3. 『少年園』と『少年』の啓蒙性

『少年』は、時期によって変化はあるが、『少年園』の六園構成という総合少年雑誌の構成の特徴を共有している。こうした構成の特徴だけでなく、『少年』と『少年園』は、想定する「少年」という読者と、彼らへの教育や啓蒙という目的を共有している。

『少年』の創刊号には次のような創刊の趣旨が記されている。

今我が帝国は、我が少年の知力を資 [も] って我が国の歴史に大光彩を添え世界文化に大貢献を為さんとし、その任は重くその責は大きい。

本誌は此の責任を克当しうる活動的・進取的・発明的大国民を養成する為に現れた明星である。新大韓の少年は須臾の間も離すべきでない。<sup>30</sup>

私はこの雑誌の刊行する趣旨に対して長く語らぬ。

しかし、一言で簡単に言うならば、

「我が大韓をして少年の国にせしめよ。さらば、能くその責任を堪当するよう  
に彼を教導せしめよ」

この雑誌がたとえ小さくとも、我が同人はこの目的を貫徹する為にあらゆる方法をもって努める。

少年にこれを読ませよ。同時に少年を訓導する父兄にもこれを読ませよ。<sup>31</sup>

『少年』の発行の目的は、少年の責任を自国である大韓帝国の歴史だけでなく世界の普遍的な文化に貢献することに置いた上で、こうした特殊かつ普遍的な責任を果たすために少年たちの知力を養成することにある。今後の責任を達成するために、少年たちは教育を受けるべきであり、こうした教育を受けた存在が「新大韓の少年」となる。しかし、『少年』は、もう一つの教育の対象

30 「表紙」『少年』第1年第1号（1908年11月1日）。原文は朝鮮語。日本語訳・句読点・[ ]は引用者による。日本語としては不自然なところもあるが、原文のニュアンスを残すために原文に近い形で訳した。以下同。

31 「刊行趣旨」『少年』第1年第1号（1908年11月1日）。

として大韓の少年の「父兄」たちをも呼び出す<sup>32</sup>。その理由は、少年に対する教育は「訓導する父兄」の責任でもあり、彼らが自ら学んで少年を教える責任を持っているからである。『少年』の目標は、少年と彼らの父兄をともに教育し啓蒙することにある。このような、少年雑誌の読者が少年だけでなく、彼を育て教育すべき父兄のような成人の知力にも関わるという発想は、『少年園』からも確認できる。

学校教育の開進せると既に其れ此の如し、予輩は実に日本の為これを賀し国民の為にこれを祝するなり。然りと雖も教育の事は独り直接なる学校教育の力に頼る可からず、家庭の教育も亦一大勢力なり、社会の教育も亦一大勢力なり、而して実に印行書類の教育に及ぼす力も是れ亦一大勢力なり。[中略] 予輩は一に今の少年諸君中小学の生徒諸子に向て大に望を属するものなり、明治の教育が如何なる美大の果を結ぶや一に諸子の未来に之を見んと欲するものなり、然るに世人が此の間接の教育を見ることと今だ甚だ深からずして、彼の読書の少きは、真に教育世界の一大欠点として憾まざるを得ざるなり。此の少年園の刊行は其目的実に此の欠点を補ふ外ならず、[中略] 世の少年の師父よ、少年園は將に往て卿等の家を訪ふなるべし、卿等請ふ可愛の少年に紹介し、握手接吻の榮を得しめよ。是れ少年園が初刊に当て少年の師父諸君に告ぐる第一の希望なり<sup>33</sup>。

教師や教科書の編纂という山縣悌三郎の経歴とも関連するが、この刊行趣旨の冒頭には、帝国大学を頂点とする近代的学校制度が日本で十分に施行されている状況が述べられている。『少年園』が刊行された1888年前後の時期は、日本の初等・中等教育が大きく変わる時期であった。日本政府は1872年より「小学・中学・大学の三段階からなる単一系統の学校体系を基本<sup>34</sup>」とする「学制」を施行し、1879年には「小学校教育の整備によって国民教育の基礎を確立する<sup>35</sup>」「教育令」（1880年改正、1885年再改正）を頒布した<sup>36</sup>。雑誌が刊行される2年前の1886年に初代文部大臣である森有礼（1847～1889）の改革案の一つとして「小学校令」が公布され、6歳から14歳までの義務教育が施行された<sup>37</sup>。そして、『少年園』の刊行の2年後である1890年には「教育勅語」が公布され、天皇を頂点とする国家主義的初等・中等教育が制度化された。『少

32 『少年』が「父兄」を読者とすることについては、前掲昇시현（2009）、49頁、前掲권두연（2016）、489頁。

33 「発刊の主旨を述べて先づ少年の師父に告ぐ」『少年園』第1号（1888年11月3日）。

34 山本正見『日本教育史：「今」を歴史から考える』（慶応義塾大学出版会、2014年）、77頁。

35 前掲山本正見（2014）、93頁。

36 同書、77～105頁参照。

37 同書、129～131頁参照。

38 同書、139～155頁参照。

年園』の創刊号には、引用した刊行趣旨とともに「天長節を祝し開園の諸言とす」も載っており、創刊号の発行日を明治天皇の誕生日である天長節に合わせていたことが分かる。『少年園』をはじめとする少年雑誌は、近代的学制に基づいて、小国民である少年を明治日本の未来の国民へと創っていく企画の一翼を担っていた。『少年』の創刊当時、近代朝鮮では日本に比べて近代教育の普及や学制の体系化が行われていなかった。近代朝鮮の学校教育の状況は近代日本とは異なるが、こうした国民国家主義に貢献しようとする少年雑誌の性格は、「新大韓」の少年を創っていく『少年』の趣旨とも合致する。

明治期の学制と教育界の変化を背景として刊行された『少年園』は、少年の教育において、学校教育以外にも家庭・社会・書籍による教育が重要であると語る。『少年園』の発行の目的は、こうした学校教育以外での教育にある。だが、学校教育以外の教育は、『少年園』という雑誌の発行だけによって成し遂げられるものではない。実際にはこの雑誌を日本の少年に読ませ教育する「師父」の役割が重要である。『少年』で確認したように、『少年園』においても、成人の少年教育の責任とそのためへの努力や学習の必要性が訴えられている。「師[と]父」すなわち学校と家庭の各自が少年を導く存在として設定されていることが、『少年』とはやや異なる。家庭だけでなく、学校教育をも念頭においたことは、明治における学校制度の変化、およびその社会的重要性が強調された近代日本の社会状況があったからであろう。

『少年園』と『少年』が読者投稿欄を設けて投稿を促したこととその結果は注目に値する。なぜなら、一つには読者形成の問題として、雑誌という媒体を通じて文学場あるいは文学制度が形成される現象を示しており、またもう一つには、少年が啓蒙される受動的な存在から啓蒙する主体的な存在へと変貌するプロセスを示唆するものだからである。

『少年園』の読者投稿に関する石井研堂の文章から確認したように、投稿文が雑誌に掲載されるのは、投稿者個人の栄光であると同時に若い名士たちが知識人のネットワークに参加することでもある。言い換えれば、投稿文が掲載されるのは、少年が知識人になる体験あるいは訓練である。少年はこのような作文の訓練を通じて、教育を受ける存在から他人を啓蒙する存在へと変っていく。少年雑誌の読者投稿欄は、少年が主体的に参加する場を提供することで、彼ら自らが参加者であり主体であるという意識を形成していく媒体になる。『少年園』の場合、読者投稿の企画が成功し、『少年文庫』『文庫』に続く文庫派という日本の近代文学の一翼を担いながら文壇を形成した。もちろんそのもう一つの背景には前述した日本の近代教育の制度の変化と活性化があり、これらの要素が互いに影響し合いながら未来の国民であり文学者である少年を育成

していく。

一方、近代朝鮮の『少年』の場合は、読者投稿が活性化していない<sup>39</sup>。しかし、後に朝鮮近代文学の巨頭に成長する李光洙（イ・グァンス）（1892～1950？）が『少年』の投稿欄を利用して『少年』の啓蒙趣旨を代弁する存在となり、それ以降の文学界を準備している。例えば、通巻20号である第3年第8巻の「少年論壇」には、「弧舟」すなわち李光洙の文章が多数載っている。「余の自覚した人生（여의 자각한 인생）」「天才」「朝鮮人の青年たちに（조선 사람인 청년들에게）」を投稿している。李は「朝鮮人の青年たちに」で「朝鮮」「大韓」の「青年」たちに次のように訴える。

今日の大韓青年は他国ないし他地域の青年とは違う。他国ないし他時代の青年と言えば、彼らは彼らの祖先がすでに成しておいたことを継承し、これを保持し発展させればそれでいいが、今日の大韓青年の私たちはそうではなく、何もなく、空々漠々なところにあらゆるものを建設しなければならない。創造しなければならない。よって私たち大韓青年の責任は、より重く、より多く、よって私たちの価値もより高貴である。人生の価値は努力に正比例して上がるのだから。私たちはとても良い時機に稟生した。ああ、千古無多の良い時機ということばを、これによりやく適用できる。青年よ、青年よ！ [中略]

余は覚めたのだ。夢から、蒙昧から、愚鈍から。そして、喉頭まで出ていた慟哭は元のところに追いつ返され、喜びの笑いに変わって顔色に出た。<sup>40</sup>

李光洙はまず日本留学中に日本人から「朝鮮人」と呼ばれることが不愉快だったと告白する。李によれば、壇君からはじまる「朝鮮民族」は本来由緒ある存在だった。その後、「朝鮮」の位相が低くなったのは、後代の朝鮮人たちが努力せず酒食と道楽におぼれ、現在の朝鮮人の様子が悪化してしまった結果である。それゆえ、ほかの国や時代の青年たちは先代が成し遂げていたものを「継承」「保存」すればいいが、「朝鮮」「大韓青年」たちには「そんな機関もなく、そんな便宜もない。私たちを教導できる父老がいるだろうか。学校があるだろうか。社会があるだろうか。報誌があるだろうか。もちろんそんなものは何もない」と嘆く。こうした何もない悲しい「朝鮮」の状況を嘆いて悲しんでいた李光洙は、「夢から、蒙昧から、愚鈍から」「覚めて」その悲しい過去を喜びの未来へと逆転させる。「大韓青年」に自ら「あらゆるものを建設しなければならない」と、新しい「朝鮮」である「大韓」を創造していく責任を感じて

39 新文館から刊行された少年・青年雑誌の読者投稿の企画とその結果については、前掲권두연 (2016)、490～503頁が詳しい。

40 弧舟「朝鮮사람인 청년들에게」『少年』第3年第8巻（1910年8月）。原文は朝鮮語。日本語訳は引用者による。

「青年よ、青年よ！」と誇らしげに叫ぶ。この叫び声は、李光洙自身がこれまで蒙昧な存在であったことを告白する声であると同時に、現在蒙昧の状態にある若い人々すなわち「少年」「青年」に覚醒を促す啓蒙的行為でもある。

『少年』の読者投稿企画の試みは、新文館で刊行した後続の少年・青年雑誌にも受け継がれている。崔南善と新文館が『少年』の読者投稿を通じて、少年を、啓蒙される存在ではなく、啓蒙する主体的存在にしようとした企画は、『少年園』をはじめとする近代日本の少年雑誌の成功事例を参考して転用したとも言える。<sup>41</sup>

ところが、『少年』は、『少年園』とその六園の構成と読者の想定という側面で類似する思想を共有しつつも、当時の大韓帝国の状況に合わせた形で、その構成と内容を変えていく。例えば、創刊号の「少年漢文教室」と通巻9号（1909年8月）から通巻12号まで確認できる「少年論語」は、当時の朝鮮の漢字・漢文教育の必要性を背景とした企画である。<sup>42</sup>そして、1905年に第2次日韓協定（乙巳保護条約）によって大韓帝国が日本の保護国になったときには、自ら命を絶った閔泳煥（ミン・ヨンファン、1861～1905）に関する「閔忠正公小伝」（通巻3号、1909年1月）や、壬辰倭乱・丁酉再乱（文禄・慶長の役）のときに朝鮮水軍として活躍した李舜臣（イ・スンシン、1545～1598）に関する「李忠武公軼事」（通巻12号、1909年11月）など、朝鮮の偉人に関する記事を通じて、当時の大韓帝国の状況と過去の歴史を少年に伝えようとした。また、『少年』は青年修養会の機関紙の役割もしており、通巻10号（1909年9月）から青年修養会に関する記事と「青年修養会報」が載るなど、青年修養会との連携を通じて啓蒙活動を展開していく。『少年』は、従来の日本の総合少年雑誌の構成とその内容を、ただ受け入れることではなく、それを典範として参照しながらも、朝鮮の文脈のなかでそれを翻訳し、また内容を編集する作業をすることで、朝鮮の総合少年雑誌の性格を作りあげていったのである。

#### 4. おわりに

本稿では、総合少年雑誌である『少年園』と『少年』の構成の比較、特に総合少年雑誌の典範を成した『少年園』の六園構成を『少年』に照らし合わせることで、両少年雑誌の関連性と差異を検討した。

その中でまずは近代日本と近代朝鮮の出版人である山縣悌三郎と崔南善の出

41 田中美佳は当時日本で広く読まれていた博文館の『少年世界』（1895年～1933年？刊行）の読者投稿欄と『少年』との関連性について指摘している。前掲田中美佳（2019）、55～57頁。

42 近代朝鮮における漢字漢文教育の様相と変容に関しては、前掲拙著（2018）の第6章「漢字漢文教育の変容と『幼学字聚』」を参照してほしい。

版活動を確認し、二人の接点について探ってみた。二人が直接に会っていた事実は確認できないが、朝鮮人留学生と尹致昊という人的なネットワークを二人は共有している。崔南善の出版活動には、当時の日本の出版界からの影響が多く見られる。<sup>43</sup>『少年園』と『少年』の間での詳しい転載状況などを今後検討する必要があるが、現段階においては直接的な転載の様相を確認することはできない。『少年』には、新文館が設立された1908年頃の日本の少年雑誌や翻訳物から転載されたと考えるのが妥当かもしれない。だが、『少年』には内外出版協会から出版された『トルストイ言行録』（1906）『人生の実務』（1907）『リンコンの人物及び其の事業』（1907）などの内容が転載されており、崔は山縣の出版活動に対し、とくに偉人や修養論の観点から注目していたことは確かである。<sup>44</sup>

一方、『少年園』の六園構成は『少年』にも確認でき、これは『少年園』に続く日本の総合少年雑誌を構成に六園の構成が受け継がれ、『少年』もそうした特徴を受け入れた結果だと考えられる。また、日本の学制システムの形成と大韓帝国の国権喪失の危機という異なる背景による内容の差異が見られるとはいえ、少年に対する知力の養成と小国民としての素質の涵養という『少年園』の啓蒙の論理は、『少年』にも共有されている。また『少年園』の読者投稿という企画は、『少年』やその後続の少年雑誌でも試みられ、読者投稿欄の活性化の様子は異なるとはいえ、少年を啓蒙される側から啓蒙する知識人へと変貌させる装置として機能した。

本稿では、『少年園』と『少年』の記事の転載や文体の特徴など、具体的な分析までは至っていない。また、この両雑誌だけでなく、山縣悌三郎の内外出版協会や崔南善の新文館から出版された刊行物と、『少年』への転載の様相について検討する必要がある。こうした作業を通じて、山縣悌三郎と崔南善、内外出版協会と新文館という視点から、近代日本と近代朝鮮の出版や翻訳物の関連性や、その啓蒙性の一面を浮彫りにすることができるだろう。

43 前掲田中美佳（2019）参照。

44 前掲田中美佳（2019）の「表2『少年』における翻訳作品の底本一覧」（79～84頁）参照。

表1 『少年園』第1号(1888年11月3日)と第156号(1895年4月18日)の目次

『少年園』第1号(1883年11月3日)	『少年園』第156号(1895年4月18日)
「発刊の主旨を述べて先づ少年の師夫に告ぐ」	「赤十字社員清兵を治療す(巻首の挿畫)」
〈少年園〉	〈少年園〉
「天長節を祝し開園の緒言とす」	「頂上に空位あり」
柴四朗「朋友の感化」	〈学園〉
「徳富猪一郎氏の寄書」	「軍艦論」
〈学園〉	医学博士 北里柴三朗「肺結核に就て」
能勢栄「手紙の書方」	〈文園〉
朝比奈知泉「鸚鵡瑣談」	ユーゴー原作・抱一庵主人訳「ABC組合」
〈文園〉	〈譚園〉
伊沢修二「天長節の児歌」	不知庵主人「失意の大改革家」
井上十吉「THE DEATH OF ATSUMORI」	南龍生「由比正雪」
饗庭篁村「紅葉」	〈叢園〉
〈譚園〉	「赤十字社員清兵を治療す」
大森惟中「少年園の案内」	「井上前文部大臣の葬式」
「大人の幼時」	「渋沢氏の観化宴」
「游学の栞」	「狩猟法」
〈叢園〉	「射的会」
「此の紋は動きます奇妙です」	「短艇競漕」
「少年界の近事」	「士官学校の入学志願者」
「面白き問題」	「小金井の櫻花」
「近著の略評」	「虎列刺」
〈芳園〉(第1号の付録)	「正則尋常中学校卒業式」
「送五十嵐君赴暹羅」	「松風会」
「会津成ニ遊ブ記」	「新刊略評」
「秋日舟ヲ泛ブノ記」	〈芳園〉
「美麗ナル家」	「京都博覧会の記」
「鶯」	「年月日」
「故ニ、ナラン」	「学者と籠城」
「兄弟」	「春の色」
「経気球ノ記」	「今様」
「出水見舞ニ答ブル文」	「詩」
「出産を賀する文」	
「少年園ノ発行ヲ祝ス」	
「少年園ノ出生ヲ祝ス」	
「少年園ノ発行ヲ祝シ併セテ記者ニ望ム」	

表2 『少年』第1年第1巻(1908年11月)と第3年第8巻(1910年8月)の  
目次および『少年園』六園との対照表

『少年』第1年第1巻(1908年11月)	『少年』第3年第8巻(1910年8月)
「少年十一月曆」	「으루쓰벨트氏의 世界的 偉대한 所以」
「海에게서 少年에게(詩)」〈文〉	〈譚〉
「少年時言」〈小〉	「天主堂의 層層臺(詩)」〈文〉
「가마귀의 空望」〈叢〉	「國風 二首」〈文〉
「黒軀子노리」〈文〉	「少年時言」〈小〉
「甲童伊와 乙男伊의 相從」〈叢〉	雜言十
「公六의 愛誦詩」〈文〉	「祖上을 爲해(唱歌)」〈文〉
「이슽의 이야」〈文〉	「少年論壇」〈芳?〉〈小?〉
바람과 벗	孤舟「余의 自覺한 人生」
主人할미와 下人	孤舟「천재」
孔雀과 鶴	孤舟「朝鮮人사람인 靑年들에게」
「큰 痘生」〈学〉	「大朝鮮情神(國風 七首)」〈文〉
「해상대한사」〈学〉	「새의 불으지짐(國風 五首)」〈文〉
왜 우리는 海上冒險心을 감투어 두었나	「더위치기(國風 五首)」〈文〉
海의 美觀은 웃더한가	「사랑(譯詩 假人)」〈文〉
「바다란 것은 이러한 것이오」〈学〉	「笑天笑地」〈叢〉
「가을뜻」〈文〉	설틈업시
「少年漢文教室」	아모리나
「巨人國漂遊記」〈文〉	墓碑銘
「少年讀本」〈小〉	저조하난 것으로
「少年史傳」〈譚〉	「少年金鑛(八則)」〈小〉
페터大帝傳	「言行之 본」〈小?〉
「러시아는 웃더한 나란가」〈学〉	獄中の 平安
「少年訓」〈小?〉〈譚?〉	惡意의 應報
「鳳吉伊 地理工夫」〈学〉	放浪罪의 被告人
「大韓의 外圍形體 알아내시오」〈学〉	人心의 勢力
「薩水戰記」〔目次のみ、未掲載〕	孤舟「獻身者(小説)」〈文〉
緒言	「去年此時の 執筆人의 風流」〈叢〉
「快少年世界周遊時報」〈叢〉	公六「카부우르 誕生百年 紀念頌」〈小?〉
第一報	〈文?〉
「少年文壇」〈芳〉	孤舟「卷頭의 額字」
投稿必遵	崔南善「諸君의 協助를 求함」
皮封式樣	「靑年學友會報」
「나아가라瀑布」〈学〉	
「少年通信」〈芳〉	〈付録〉
文例四則	錦頰山人「國史私論」
「少年應答」〈芳〉	「隆熙四年九月重要日誌」
「編輯室通奇」	

※ 略号: 〈少年園〉: 〈小〉、〈学園〉: 〈学〉、〈文園〉: 〈文〉、〈譚園〉: 〈譚〉、〈叢園〉: 〈叢〉、〈芳園〉: 〈芳〉

※ 「公六「카부우르 誕生百年 紀念頌」〈小?〉〈文?〉」のように「〈小?〉〈文?〉」がともに記されているものは、二つの要素をともに持っており、区分が難しい文章を示す。

## 謝 辞

本稿は、2018年2月24日に韓国の高麗大学で開かれた学術大会「六堂崔南善と近代韓国の人的・知識地図」で発表した内容をもとに、科研費・若手研究「植民地期朝鮮における思想史研究の基礎構築（1）：民族改良・実力養成・自治論」（研究代表：柳忠熙、課題番号：18K12214、研究期間：2018～2021年）の助成を受けて行った研究の成果を反映し、修正・加筆したものである。

**Keywords** : 山縣悌三郎 崔南善 少年雑誌 『少年園』 『少年』

